

<要 旨>

本研究では、模擬患者養成と模擬患者を活用した教育を行い、その評価を行った。またイーハトーブレジデントスキルアップセミナーにおいて研修医の客観的臨床能力試験に模擬患者として参加してもらった結果、模擬患者としての能力や意欲の向上を図ることが出来た。岩手県立大学看護学部の基礎看護学実習の事前演習においては模擬患者がフィードバックの司会を務める対話型のフィードバックを導入し、看護学生に対し一定の学習効果を得た。

1 研究の概要(背景・目的等)

模擬患者活用教育は米国において1964年に初めて医学教育に活用したもので、北米では医学、看護教育において模擬患者活用教育が広まり、その効果が認められている。本邦においても1992年から模擬患者活用教育が医学教育中心に広がり、医学生のコミュニケーション教育にその活用が行われてきた。近年は薬学教育や看護学教育においても広まりを見せている。さらには卒業教育として研修医に対する客観的臨床能力試験(OSCE)を行う取り組みも始まっている。岩手県においても、本学の看護学部、岩手医科大学、岩手県医師支援推進室などで模擬患者を活用した教育が行われ始めたが、模擬患者は、臨床看護師や劇団メンバーなどを一時的に活用したものが多く、本学看護学部のように地域住民を専門に養成し、積極的に活用する手法はとられておらず、患者の目線での意見が十分反映されているとは言えない。一方、我々は看護基礎教育において、地域住民を継続的に養成し模擬患者活用教育を実施してきた経緯がある。そこで、その経験とリソースを活かし、医師、薬剤師、臨床検査技師といった医療職全般に質の高い模擬患者活用教育を実施するための基盤作りを行うために、より多様な場面での模擬患者の活用とそれに必要な模擬患者の養成を行い、その効果を検証することを目的として本研究を行った。

2 研究の内容(方法・経過等)

1) 模擬患者講習会の開催

本研究の対象者となる模擬患者候補者に対し、模擬患者および模擬患者活用教育の概要、模擬患者の演技、フィードバックの方法についての約4時間の教育を行った。模擬患者は過去に本学看護学部の教育に模擬患者として参加してもらった者および新規に新聞広告で募った者、本学の清掃業者の従業員(管理者への委託)である。参加者に対して事後にアンケートを行った。

2) 研修医OSCEにかかる模擬患者養成とOSCEへの参加

まず、岩手県イーハトーブレジデントスキルアップセミナーと同様の客観的臨床能力試験を行っている全国研修医OSCE大会に本研究者が研修医の評価者として参加し、研修医OSCEの目的、方法、効果およびその実施に必要な

な模擬患者の能力について把握した。

次に、上記の講習会に参加した模擬患者の中で研修医のOSCEに参加する希望があった者13名に対し、5時間の講習会を行った。講習会は、模擬患者の概要と研修医OSCEの目的、模擬患者の演技とフィードバックの概要に関する講義と実際の研修医OSCEの場面で行われる場面演技演習とフィードバックの演習であった。模擬患者にはその後、3時間程度の模擬患者の実技・フィードバック演習に1~3回参加してもらった。

イーハトーブレジデントスキルアップセミナーには模擬患者として8名(全て女性)、見学者として2名の模擬患者が参加した。模擬患者の参加する研修医OSCEにおいては、症状を持つ患者の退院指導に向けた情報収集場面と退院指導場面の二つの場面に模擬患者が活用された。

OSCEに参加した模擬患者および見学した模擬患者にOSCE終了後30分程度のグループインタビューを実施した。

3) 対話型模擬患者活用教育にかかる模擬患者養成と模擬患者演習の実施

本学の看護学部2年生の基礎看護学実習前の準備としての演習において対話型模擬患者演習を行った。なお、事前に1回模擬患者に対する講習会を行った。模擬患者講習会の内容に加えて、フィードバックを含めて演習をファシリテートするための内容を加えた。演習に参加した模擬患者および学生に対し事後にアンケートを実施した。

3 これまで得られた研究の成果

1) 模擬患者講習会に参加した模擬患者について

参加者は27名(男性9名、女性18名)であった。そのうち研修医OSCEへの参加を希望するものは11名であった。

回収されたアンケートのうち模擬患者を実際にやってみることを希望しない参加者の感想は、「学生の笑顔がとても良かった、1・2年生の学生でも物足りないと言うことはなく、安心して任せることが出来た」、「今後もがんばってもらいたい」と学生に対しては、肯定的な感想であった。

研修医OSCEに参加希望の模擬患者の学生のケアについての感想は、「若者のエネルギーを感じた、学生が良くできるので驚いた」、「現場で通用すると思う。心の優しい看護師になると思い、楽しみである」、「声掛けが優しく丁寧、

「学生が話しやすい言葉で話していた」、「笑顔で接してくれて安心感があった」と肯定的な評価が多くみられたが、高齢者に話すには声が小さいとの指摘もあった。

模擬患者演習全体に対する感想としては、「年配者を良い意味で活用してほしい」、「勉強になった」、「看護学生などの役に立つと思う」、「参加してよかった」、「学生同士での演習より模擬患者を使った演習の方が効果的だと思った」と模擬患者演習とそれへの参加に意義を感じる回答が多かった。

清掃業者への委託によって集まってもらった者からは模擬患者としてやってゆきたいという回答は見られず、有志のボランティアとして参加してもらうことが有効であり、ボランティア模擬患者の活躍の機会を社会に広く知ってもらうことが重要であると考えられた。

2) 研修医 OSCE へ参加した模擬患者について

研修医 OSCE に参加した模擬患者 8 名および見学者 2 名に、参加して得たもの、困難であったこと、要望等についてグループインタビューした。その結果、看護学生の演習に比べて、責任を強く感じ、プレッシャーが強いこと。そのためシナリオを覚えることに対する負担が重いことが分かった。実際の OSCE においては、準備していた内容に関してほとんど聞きだせない研修医が多く、また沈黙場面が多くて対応に苦慮したという意見が多かった。模擬患者からは課題の提示方法に問題がある可能性が指摘された。得たものとしては、評価者のフィードバックが参考になるということであった。さらに自分の受療行動など影響があったかという質問に対し、医師や看護師などの医療者をよく観察するようになったという意見や、健康に注意するようになったという意見があった。また、模擬患者は研修医 OSCE に参加した充実感を感じてはいたが、自分たちが医療者の接遇やコミュニケーションを積極的に変えてゆけるのだというより積極的な感想を聞くことは出来なかった。

なお、OSCE の評価者であった医師からの模擬患者への感想としては模擬患者の能力の高さを指摘するものが多く聞かれている。

3) 対話型模擬患者演習に参加した模擬患者について 学生のアンケート結果

患者へのケアの説明の仕方や同意の取り方、コミュニケーションでの注意点、バイタルサイン測定に関する技術的な注意点、安楽への配慮、測定結果の説明における注意点、症状や不安を持つ患者の心情の聴きかた、言葉遣いの項目について 6 件法で演習の前後で質問した結果、概ね 1 段階程度出来ると思う程度が高まっていた。また実習に自信を持って臨むことが出来るという項目についても同様の結果であった。

自由記述では、「フィードバックを通して、自分では気づかないことへの気づき、患者の心情の多様性の気づき」、「少しの声掛けで印象が変わることが分かった」、「専門用語を

使わずに話すことの大切さが分かった」、「学生や教師以外の人に評価してもらうことが有益である」、「自分の言葉遣いの癖がわかった」、「不安を持つ患者へのアプローチ方法が分かった」と患者とのかかわり方についての有益性を指摘する回答が多く得られた他に、「患者の立場に立った意見を聞くことが出来た」、「実際の患者とのかかわり場面をイメージできる」、「模擬患者からのフィードバック用紙の言葉が嬉しい、自信につながった」、「地域の住民の意見を聞けることで、看護職に進むことが自分だけの夢ではないことを感じ、気を引き締める機会になった、と模擬患者と触れ合う機会自体の有益性を示す回答も多く得られている。

その後の実習指導に参加した教員から、学生が患者や医療スタッフに対し以前より積極的にアプローチして実習を進めている場面が見られたとの意見があった。

模擬患者の意見として対話型模擬患者演習で学生と直接コミュニケーションを取ることが出来ることに模擬患者としての喜びややり甲斐を感じるという指摘があった。また、さらに模擬患者としての活躍の機会がほしいと言う要望もあった。

しかし、模擬患者からのフィードバックが参考になったかという質問で、ほとんどの学生が 6 段階の 6 の回答であるにもかかわらず数名の学生が 4 と回答しており、模擬患者の進行やフィードバックのばらつきが影響したのではないかと考えられ、模擬患者のフィードバックの質の担保の必要性が認められた。

模擬患者活用教育の有益性に関しては学生の学習にとって非常に有益であることが確認された。模擬患者になることはその人自身にとってもやり甲斐や生き甲斐に繋り、有益なものであることが分かった。模擬患者活用教育の場面を増やすことやその多様性を増進することは、模擬患者の質を向上し、意識を高めて行くことに貢献する事が分かった。更に模擬患者を経験した者は医療者を客観的に見る傾向も認められた。しかし、より積極的に自分たちの力で医療の現場をより良いものにしてゆこうとする意識は認められなかった。

4 今後の具体的な展開

本研究は今後も継続してゆくもので、更なる模擬患者の技能の向上や人数の確保が必要となる。技能の向上のためには講習会の開催や認定制度の設立も有効な手段となる。また、そのためにも模擬患者活用の機会を増やすことや活用方法の開発が必要となる。岩手県内では近年中に 2 つの看護学部が設立が予定されている。今後は基礎教育、研修医教育以外にもさまざまな医療スタッフの卒後教育においても模擬患者は活用できる可能性がある。そういった多様な機会での模擬患者活用場面を増やすとともに、その効果を検証してゆく。

5 その他(参考文献・謝辞等)

本研究は模擬患者の皆様、岩手県医師支援推進室の協力を得て行っており、御協力に感謝します。